孫太拾遺信史記

前篇

十三

特別
八 13
2507
13

遠
2507
23-13

繪本拾遺信長記初篇巻之十三

目録

自本願寺ゟ於毛利家兵粮事

九字の名号老人ゟ命ぜらるせ給ふ

雑賀商人と杜ゟ兵粮を毛利家へ備る

松永ゟ書兵商人ゟ荷物を汲む

石山密使欺松永書兵事

布商人書兵と計る

堺湊より商船を奪ひ

石山の後者毛利家へ御書を送れ
毛利家入兵糧石山事
川分口の番船室乃浦を拓く
毛利乃計川分口船軍之事
同図

繪本拾遺信長記初篇卷之十三

自本願寺元旅毛利家兵糧事

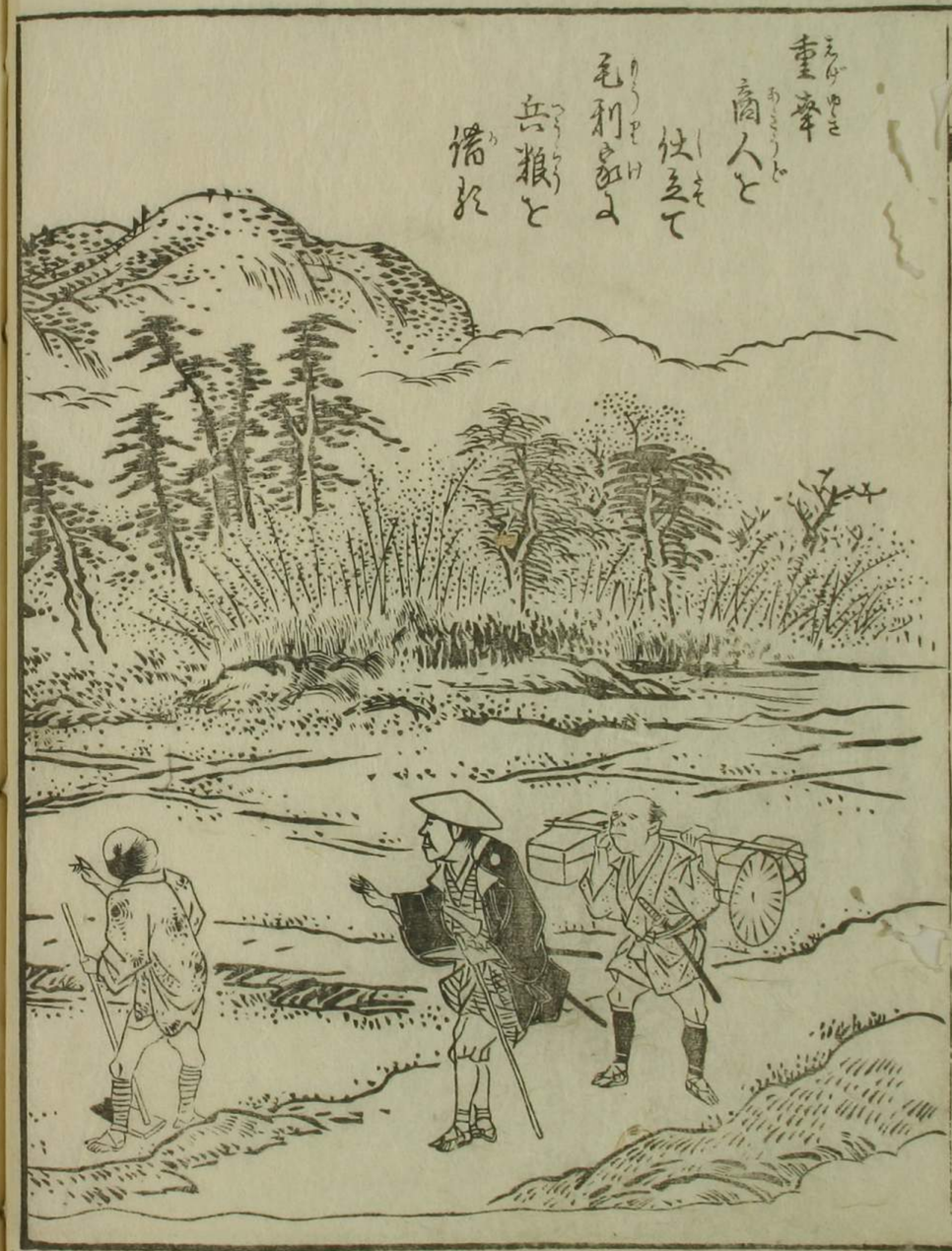
信を積も乃い信報あり悪を積者悪報あり云ふ也び遠く去
ども義を離しとつり給本巻人年いまゞ幼しとつへども宮
よ弥陀乃折云教を信じ仮ゑも曲まる私を捨せば忠孝
乃二つを兼ねし信心の旨を本祈とる世る報應を信者
の摘と迹を強欲の國義を討とめしる凡人乃乃凡業を非
び仏合戦よも開祖聖人乃御志年九字の名号を脱を付
討死せば直ち極楽往生と変宮軍者に軍をしるゞ小
心祈いゝ爽ち義馬の中と恐るゝ小林と乃戦ひにも用
ゝ人祈ハゝ助ゝ幼年の小脳ゝ強勇無双乃

九郎乃名号
老人が命と
かりうせ

前

國義を計ひかせうしい滋よ佛の助力をうけ信心勝よ諸じ
彼九字名号を唱出し一堅同よ掛く拜〳〵給うつゝくとお
ぐ〻きれば多拜なくも此名号既よりはじめ不くよ力疲をお
ひ給ひ血よまゝしく拙しろふぞ老人感涙をぐめ雖く
かくなさはしき九字の字のいるる佛縁を結び是て多智
よを立せ給ふの多拜なやと地よひ是ふして歓きるまを
理りとつゝも拙ろうりを無くけるの石山城中よ唱〳〵てく
る奇特乃拙しまはよい信長たゝ天下の兵を集め張良
陳平が計を以て押よ寄るとも何乃恐是ろみべきと
日比の勇気十倍し勇をよろこぶやもぎりはしされば老
人石山よ籠城し数度の軍戦よ名を多く欲味方乃目を

驚はとゝ人ども絶よ一度も敵を蒙りたるのるく小田卓敬
寺和睦の後い父子よとも故郷よ帰り耕をいるる〻心安く世
を過しるる後秀吉よ仕へく給木孫市と名乗り今も尚
其孫東國乃諸侯よ仕へ給木氏をれて称せらる且又る
祖聖人乃誓りの名号も其家に伝来し今よる敬せ
ずと雖仏法を紀州雑賀郷よ孫市座衆と云仏人る者あり
今い田畠とありて実ろ小其男も知る人なしと彼國の人の
物語りぬ枕も小田方の附城と定め諸多戦〻毎よ敗軍し
世の元沙法もうし給めうくるまゝ中る軍仕出さんより密く
守まく城中兵粮乃盡るを結よ紀國と乃人合せ一戦る際を
図し給くゝ合せ此後い石山方より合戦を僧せとゝ


重牽
商人と
仕立て
毛利家より
兵粮を
運ぶ

防ぎ守りて戦ひをまづ中国西国紀州等より兵粮の運送をとゞめんと其るものゝ力を尽しぬさしい城中六万余人の門徒多深して兵粮尽しく士卒飢よつゝものかゝるべくて始終心を合せ軍師重臣上人の御系よ系り言上しるい城中兵粮尽しく既に雑濁に及び其密に按ずい中国の毛利輝元い当家に因寄く疎さら敵国と成し福祐の諸侯之今当山より使を遣し上人の御書をもつて兵粮米備用の儀仕きいさるも毛利家よおひて辞退の儀いまじ其旨い信長うけて毛利を討ん志ありとつゝども当城西海の咽喉よみて到く安へく落居せず其後と断まんすと恐まゝいまゞ教て中国へ兵とのべし当城隔るば路ど毛利の雑人共家の利害此中よりあり御書と成しく仕さし拵るべしとゝるゝ上人使せ給ひ軍師の賞為のゞく毛利家深して当家の敵と仕義もべ拵て世素をとゞむ仮令毛利家より兵粮運送来るとも安積よ城よ入んや却て欲のるよ兵粮を奪ひるい城中弥困窮尽軍師いるる計りや重臣僉で曰く作のゞく為るよ立入んよ難しとも外よ求むべき方尽毛利家令義して兵粮と送り賦るくよ地ひくい系郷とめゞし来るく城中へ立入尽し枕も上人の御書とゝげ御使とべき人と大ゆるし武まるゝ農民もよしゝべ繋花の地う

物訓する商人の門後堺中より伺ひ其者を使ひせん附る一色
式部九郎門常慶をそ出す某ぶ幕下に属せる門後の中より
堺の津の商人あり此者商賣のあるとくに四九州中国などへ
数度往来し国々の事聞もよく存じ人情にも通じ
重幸歎び其男を出す後人計策とも含めん又郎九郎門岩り
使をそ遣ひ已ぶ陣屋へ呼り々ぶ秋て引ぶ」糸り々る重幸彼
男をやとろい海上人の御書を持げ首尾よく中国を訓毛利
家に達しるば莫大の恩賞命を捨て勤むべさや彼門後
と地を付歴くの御中より我ホ〻ぶ元の商人御名〻ぶ郎大
切の御使仕付らをとやさる糸此上の西用やひべき骨を挫ぶを
ぶと勢をるぶ此御用仕保せでひべきや重幸の曰く海

中国へ統んるは先堺の津より彼地にて信心の門後とる
らひ商船に又艘と仰り立堺の浦より出帆をば小田家の
番船浦〻と堅めさるとも堺の津の商人〻ぶ唐土まぐも
海上の往来自由なるん堺へ帰るは住吉の明神日向
守殿と摂へられば往来ぶ堺東平地川を
隔ひく播磨の細道より川を渡り田路村を九郎
狭山ぶ〻ぶ河内乃若江を経て堺を出る」此筋
小田方の附城なる只平地の西を松永弾正ぶ幕下の溜
村井若狭と云ふ者陣を張て往来を設るとぶ人ども歎き通り
人を安ぶ心得ぶたい当所に国西国其外乃国〻何方も
彩関とて人農商をかぎりぶ出家山伏のたぶびまでも他国の

松永が
奮兵
商人が
荷物を
改む

仕候てうゝ人死と疑ひ容易往還とゑしがたし今度の御使い
尚城中の人命をうろ石多困のうゆあるに心を責て仕換ぞ
るゆみべゝしたゝく往来ゑい関所級石てのゑ外ひ毛利家
ゑゑりてり計ゑど悪くヤ合め上人の御書帯に毛利ふ
兵粮運送の物川口本濃雑波多の砦とゆ家ひるゑ謀略
と微細ゑ語り右川小平川表大ねの苑名しう書状と二通
り密書と竹杖り中ゑ仕込門後の中より今一人の商人と
ゑゝゝ出ゝ主後二人の布商人ゑ出ゑせ其日城と出く河内
路にして急ぐせゝる

石山密使欺松永番兵事

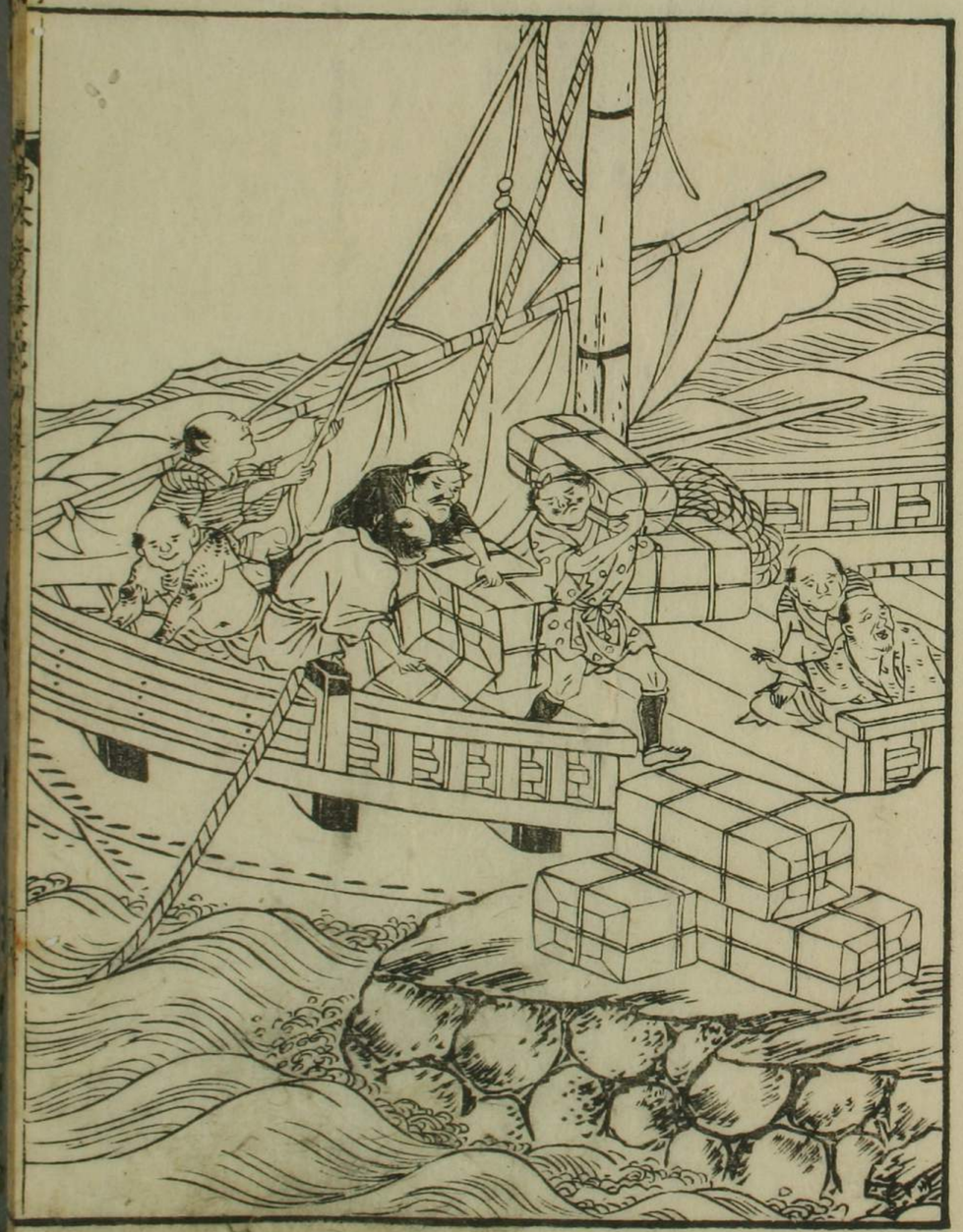
平井口と堅めうい松永弾正久秀ゝ家臣村井若狭其物ゑ

百余人陣をゑて守まゝれどゑ主人久秀ゑ霞岩うゝざう大ね
ゑて先りは三好家に荷擔してね軍家弧載しまりゑ三好ゑ
反して小田の幕下ゑ役ひしゝ付ひゑ信長と恨ゝゆありて
私ゑ反逆り企たり見ゑよりく石山寺ゑの数ゑ連ゝゝ人
ゝも墓ゝしき戦ひもゑさび事と表ゝゑ疑して附節のゑゝ
を伺ひゝる其幕下のねゑゝれば実と守屋ゝる村井若狭も
表だうい厳きまてさのゝ心い判ひざゆゝる去後ゑ石山の密使
布商人ゑ出ゑ役石の弟弥四郎して通ゝんとしゝるを番
人夢とうけてよびゝめ汝等何国の者ゝて何用みゝく何
国へ通るぞ審ゑ糺ゆまゆしと咎めゝる小主後の商人謹
で畏り私ども い京都二条に結布商内仕る者ゝて京ゑ

布商人
番兵を
欺く

くち結と仕て南都へ参りては布施を乞ひ武田の坂の澤へ
移て乞を鬻国々を巡りて後世我を者すてい近きころい
武田信長ニ石山本願寺と和睦ひ南都堺への往来なり
ぐく我々ども甚迷惑国窮敵い如此ニ多大ねも御本
堺へ引せらるを合戦も暫くお止ゝいはしかすて唱るようやうく
と言ゝのあ武士ハ又ハ商人すて毛沢胡乳なる者すてい乞ぢく
いと恐入ゝ中々なる番兵なる乞とまて先荷物の中と改めよ
と役者ぶ捧ひ堅ぐも打ひ入ひ捜ひ入れどつろ〳〵の緒ま
い糸数袋物のくぐひのくすて更ま膝〳〵き物なる更易の腰西
ま其外条より賣買の代物宝所のるる下令銀の紙又ハ小
と委ひく記〳〵何様数ひもるき商人なる細ぬまじと評議ひ

なる小番兵の内より一人既を乞ひ中々なるい石山の堺中よい
百姓及び町人の門役多く多く籠堺せり此者ども商人なれ
遣なるいひ申れども石山より向者なるんも知ぬ者ひ
偽名堺へ通て商人なるぶ地沢い多論郷役人庄やホ
の名代乞なるるん呉ぶ此不にく一ゝなやひとひひなるとき
傍の役人乞とぶ渠名なる元来京良出生の町人すて石山
へ籠堺せ〳〵者と乞へなり尤附い役人の名のくなかぶ〳〵
何なも語ぶ居るひ不審いなんと荷物と此不にとぶなき
下人い南都へ地行不の庄屋と偽ひ来るひ庄屋の印紙れ
源ぶんが通るなり叶ふまじとなりなるなる罵つゝ役商人大きる
国なり乞い恐乞入なる御銀ひ更ゝさ毎れ者なるそい乞ゝ



堺浦より
商
船と
数人

御殿ひそんぜるとゝぜひ〻〻ゆゑ〻〻と町屋人の多勢をもつて取囲
急ぎ一対を毎〻迎ゑ参るべし御国所ゑ通屋とるゝ恐ろしく
く絶ぐ〻と滅やう小歎けば徒下人委細長り冷霞夜を
こゝろて案良ゑ帰り明是ゑ〻たい屋といさるゝ参るべしとゝひ
捨て出ゝ山城と一人の夜ゑ藤猿ゑやおどさまんとたぶや
きゑ〻御書の仕迎し竹林挑げ路ゑ〻べして走り〻
見即ゑ即尤傍門ゑ幕下の門後坂の津の商人ゑ重奉ゲ
桂図ゑ渡ひ河内路ゑ経て其日暮方坂ゑ見信心の門後
十余人と語ひ商紅二艘を制〻〻其翌日坂浦を出帆〻て
中国として馳〻ゑ去程ゑ法たゞり一人の商人その夜商

物の絡紐を元出〻見い去年の変遂り出る数の〻〻拙ゑ
〻〻ひ〻〻人と番人ども〻〻出せばろひゞけゑき得付く
威徳も威勢も打忘れ〻〻心のきたる商人ゑ我く
ゑ〻に居り番の〻敵居ゑば湾夜れの勝と換ゞをいや
合戦のたゞまるや居や討死を心ともゑ我名ゑれゞ死後の恥
こと武士の性む石肌去漏傳い去も更ゑり特泉源ゑ
皆彰ゑ絡と関ひ備護ゑ知てゑげうけ神戸笠戸及び指拙
紐ゑ〻の相戸皆見彰き白絡と朱色ざれゞ我ゑ絡紐と
関ひ費ゑゑ家良の本辻橋廉室の拵君より其多ゑ〻の紐
ぐ〻や其方ゑ〻ゑれとねじ深絡白絡ゑ我巣ゑ嫡拙
ぜんゑは天隠天下の大商人都の人の心のさまゑやさしけ

石山の使者
毛利
家へ
御書を見る

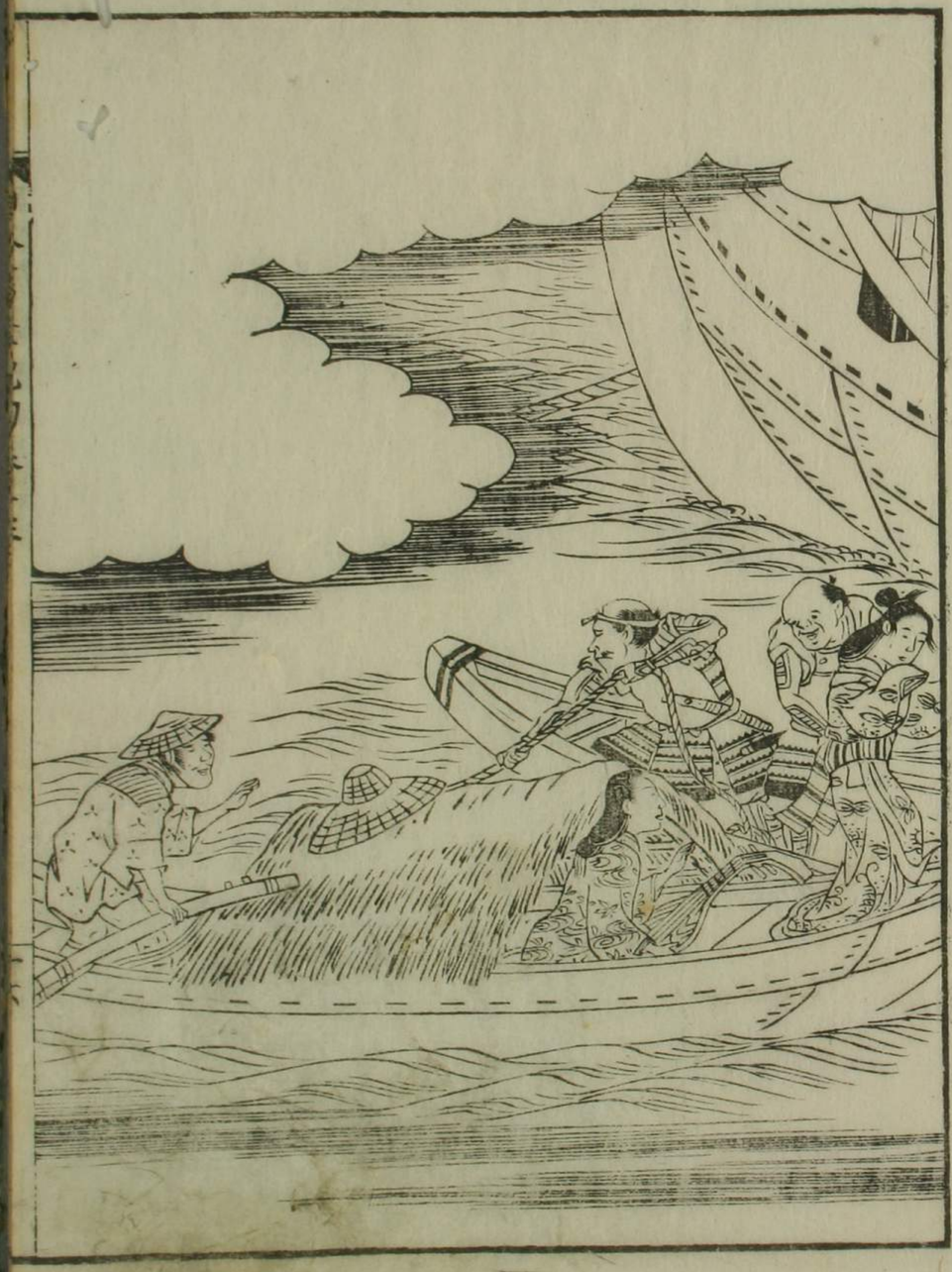
敵ハ小瀬の絡茂たる結の奥迄引なびかまうるゞ
色又馬とゞまり躍と制し今度乃合戦よりも敵よりも
前を立て奉と笑と例り咲とゆ我も〳〵と集り寄と
彼商人共をはしうと心鋭び御殺人様の御蔭にて今度
奈良堺と交易仕ゝ恐るゝの利もなれば心祝ひの献上
品と皆々れ〳〵の絡り物番兵どもまろぶる大方ゆ
交る用心の御ものゝ外甘ぎく絡く多上の物ゞゝ彼商人
い蓄ゆる比俄面に紛御ものよりそゆ殺面出て一番に石山
へ絡り〻〻番人多い心もつうゞ元来荷物帳面其まゝ捨置
れば逃失しとは美よも志ゝ敵い三度も比度もゆる東の
度志〻〻渡ゆ再び絡り来〻ざれば相ハ山商人曲者なり

元逃〻うゝそ油断ゆ念ゆれと後悔をれども詮方なく山寺廣
く沙法ゆ〻い我〻ゞ誤り陽俄ゆ元ゆ殺ゆ絡布とゆ
ゆ〻ゞ再び徳と切ゆ足と山俄ゆ無俄一度〻商人乃紛ゆ敵
先も心さゞ〻て其俄ゆ捨置ゆる先佛智の去りしむる処
ゆ〻〻重幸ゞ妙斗乃図ゆたるゝと松永が不実乃
心を抱きしとゆ合せ〻本願寺とたをけるも不忠義
なりし事ども也

毛利家入兵粮石山寺

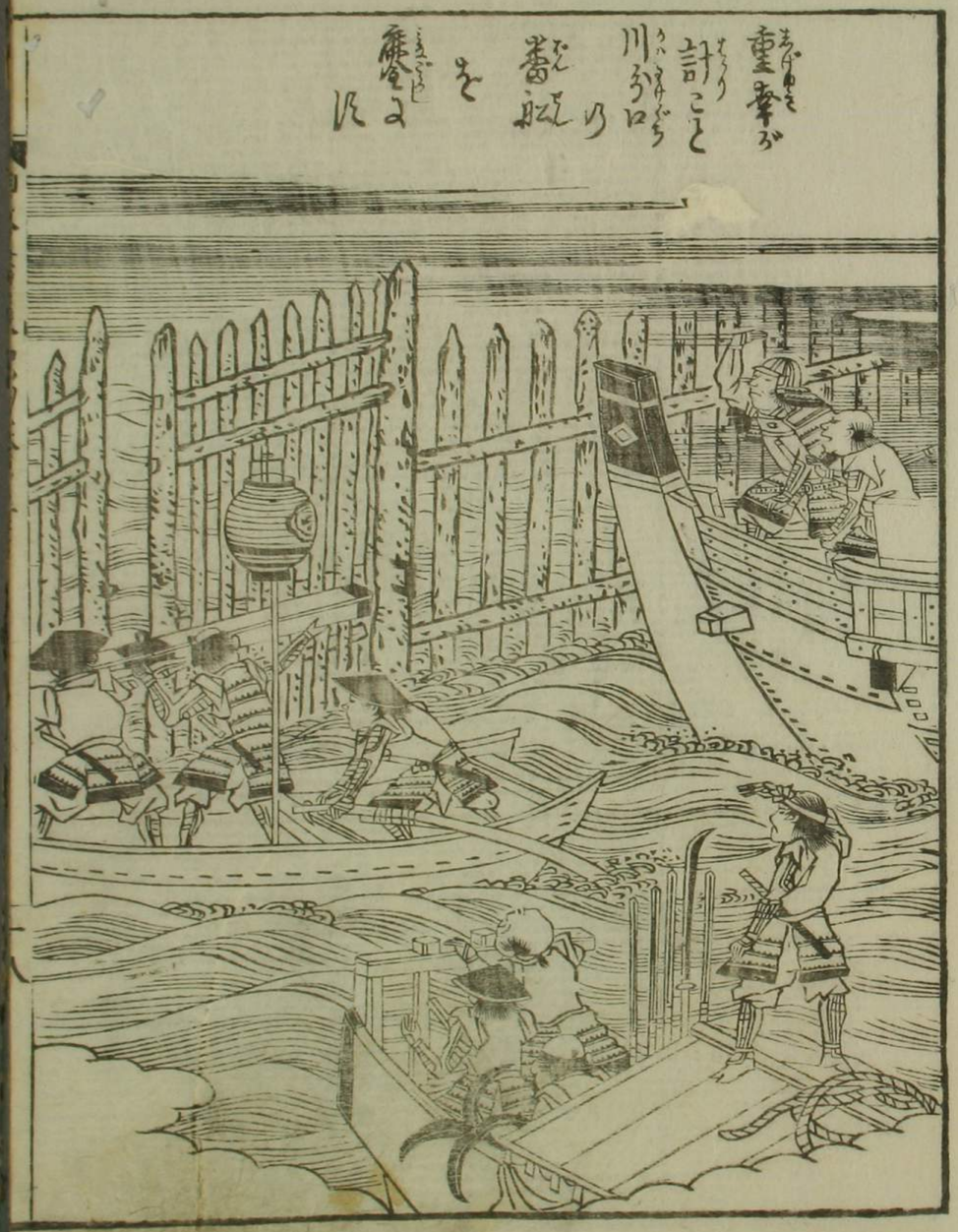
本願寺乃密使い堺浦より高松と志円らひ中国にて
弛〻しゆ不〻乃関西に〻暗むるゆ多しとゝ人ども日比
通約せる堺の商人子細ゆ及ぶまじと其俄ゆ通をもゆ

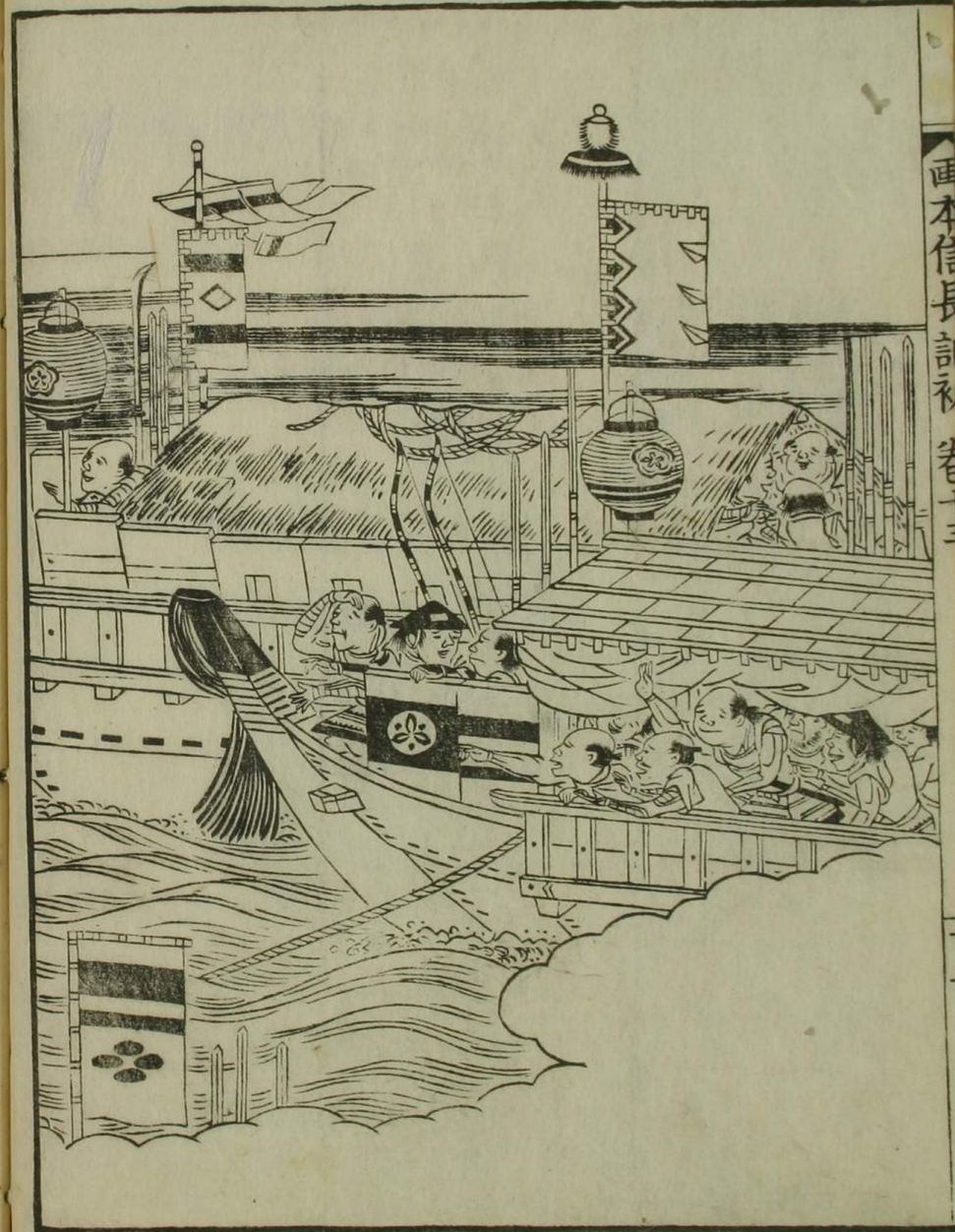
川分口の
番船
室の
柾若
と
招く

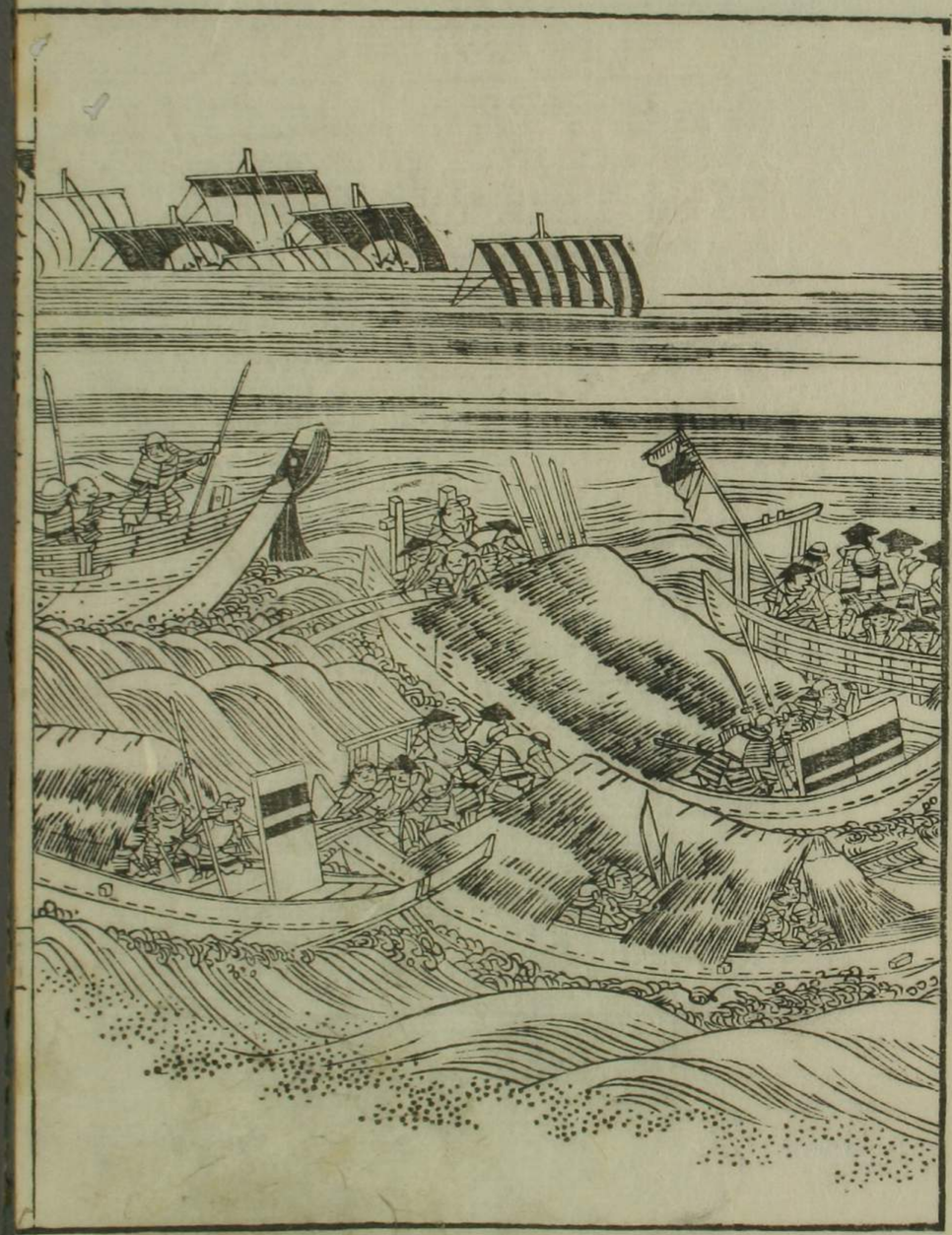


武い私中荷物等と改る者もあれど竹杖まぐるよい心も
付ば何のさうもなくて安義國之岸」数て廣瀬乃
城之ぶりか敵寺よりの密使乃告奏者之為くゝ入き
び廣瀬乃家臣等ゝ内屋け別其使を客房へ招くと只
一人乃商人謹で上人乃口上と濃香」道乃銀雞など物語よろ
しく執達数ゝ者ゝ彼所杖を刻て上人の御書を受」ゝれば
襟着之ゝ此決分と大寺乃御義ゝ被為せり毛利輝元
被き見ゝ即刻之吉川小早川の両ねと右き相談」為ゝ附之吉
川元春や為ゝ近年小田信長勢ひを州郡之振ひ推て
征夷乃軍乃重任をや為り猥りと國くと押収せんと此
此石山寺敵寺を破却ゝ彼地乃要害之城郭と築

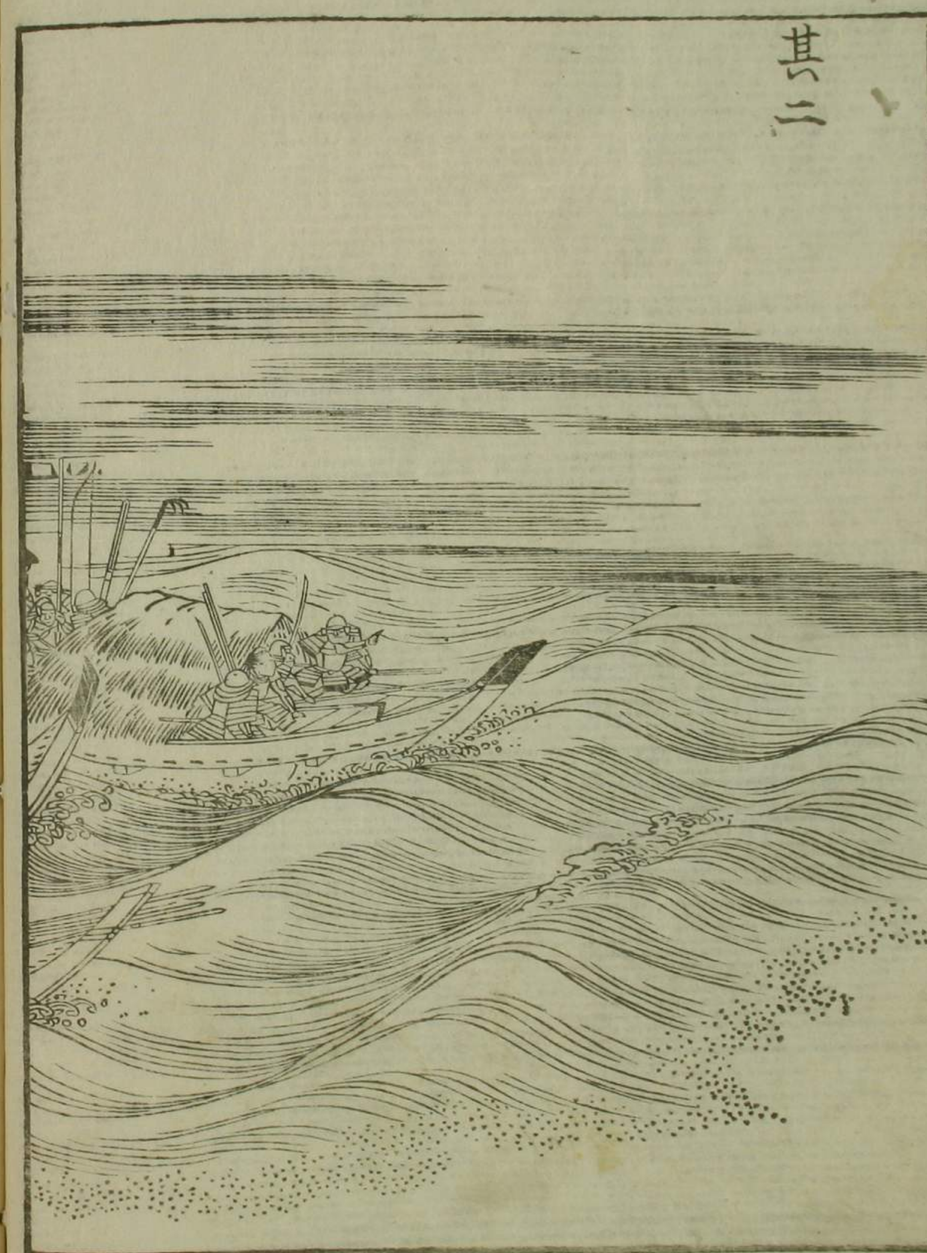
んと此是全く當家と籠ひ討んと乃結搦之抑柳州石
山乃地い西國東國の咽喉之ゝ彼城端るあ信長
亜之兵と當國之さし向ゝ」是故人乃不調居被則遠
客とは此ゝ其上當今正親町院御即位の式礼
當家より個進ゝ天下ゝ英国と為」ゝ敵如上人
乃吹挙之よ之り奉仕て今度兵粮運送の事彼乃親ひ
之應じ備ゝ人ゝ人ゝこそ當家長久乃計策なるべゝ
と理義明白之のべら之ゝ実之抑ひく体裁之も及ばれど
重ゝ應じ粮米又十万石貸ゝ人ゝ元右傾者と右て御後
さ之ゝ之れば彼使者謹で恩と附」懐中より重幸う書
状と元出ゝ粮米恩備為ゝ上い石山乃軍師玲本源左衛


重撃ぶ
討こと
川口の
番船
を
鹿ゑ


西本願寺誠忠録 巻十三



其二



門尉重幸御尚家と申合る軍奇の密書御披見給ふ
べしとて出せば小早川隆景押被きゐる大きに感じ信
長石山の城を責て度々の敗軍も理り有る謀計選き勇士
城せる所よりまつ〳〵兵粮運送をぶきかりとて虫を合と下
して七百余艘の船の船又十余石の米粟を積飯田城中守
を熟太郎と船を乃ゐ村上八郎左衛門尉兄玉内義
左衛門尉代甚左衛門地武郎を始め
に其勢都て三千余人石山の後者を使ひ順風を帆と
開き漕国として〳〵登る比い七月廿三日潮〳〵たる潮みを遥
よりのいせく搗物を海士の舞史浦風を見えつ隠れ
友多る鎧を潮も見ぬ右の八潮壇の浦左の方へ

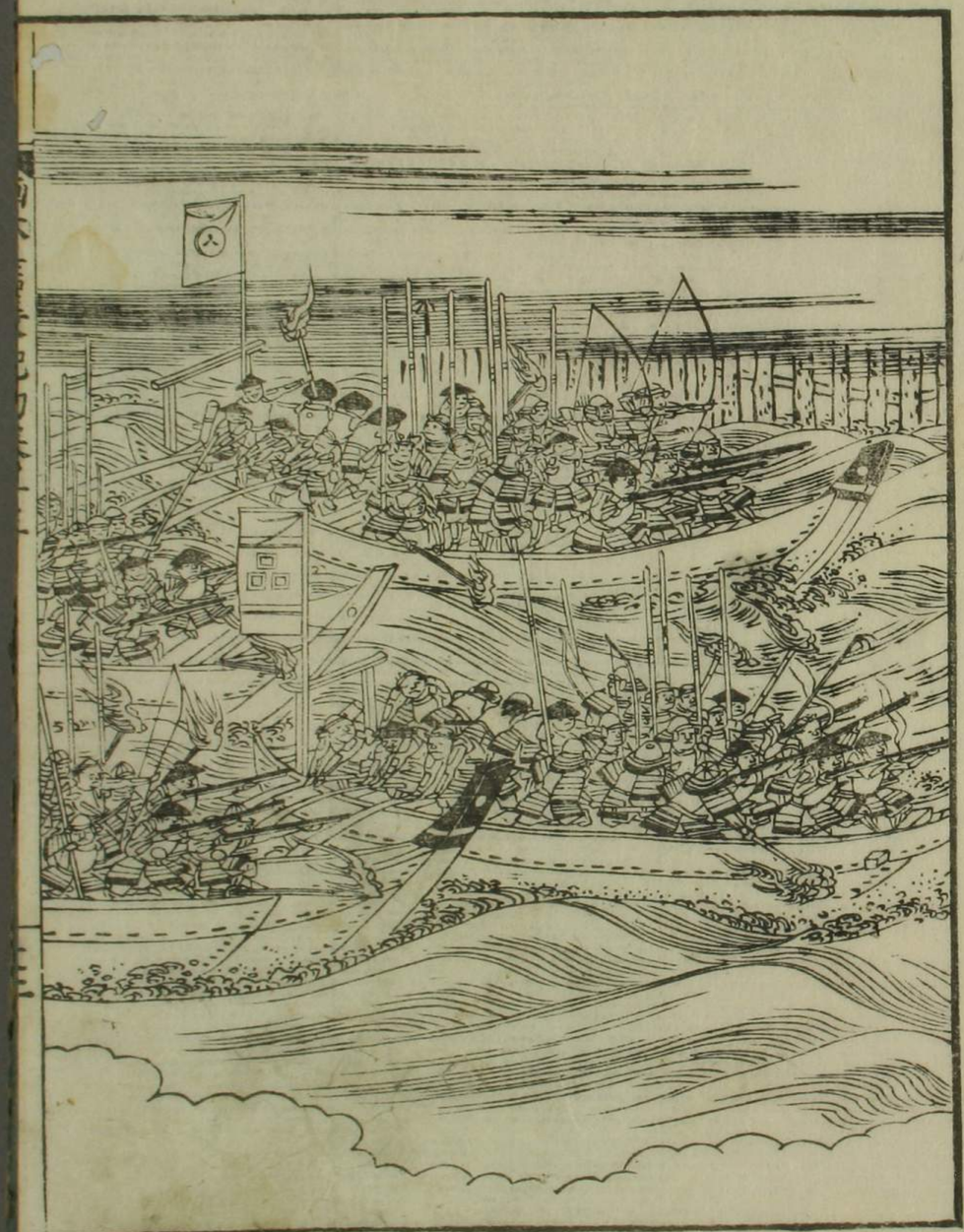
播磨路や室乃たまを女々と待とし宵の明石潟須磨
の浦よりそ見てそり叶海岸を船ども繋き飯田城中
さらば捨本が伝へ謀略と約束と室の津兵庫をば乃
花を数多うさらひ兄玉内義左衛門尉上八郎左衛門其外雑
兵数十人を乃中に船長を出せ彼花者名十余艘の
船を乃せ七月廿六日の書方川に船ととしす書船の
傍を漕めぐり後花乃御伽衆せん石せ給へ〳〵と賜る
よりけの法器を労を書しうるの番兵名こい真いなる者
の集りたるぞ石よせく酒宴を催さんとなるるこの船
ぶもより夢とひそかく招くぶ引を花多く花女いひ
ひとりれ君と寝よりしこと事人の船長名甚国り今宵い

これぞ堪能人の夜船数多に若党を揃へて積の世界なる
酒宴の御伽に侍人等さんと兜玉村上物なれバなるをしれども
かれバ兄まかせくたらんとぞ番兵等大きにふうかれさう
バ某がかふひかれ若ハ肉肥肌脂つき二十ばかりにかさねよする
年ごろに婉麗付のよき若を恐いさかひまゐるべしと絡て好
みのさまざまを船長ひとり川に呑込で甕の夜乃ずくずくし
其夜ハいまだ明ざる間に桂若伴ひて湊の方へ帰りける

川分口船軍事

明るバ七月廿七日毛利の軍ぎ飯田城中守兵士に下知し百
余艘乃小船に兎鬼の選卒六百余人を乗しめ大将小将
の鉄炮をひしと並べ昔然を震ふて桂安の船にまいらひ東

魁より酒磨浦を押登れば数百艘の兵粮船続て続く
支せる折節西風はげしく吹て成半刻ばかりに川口へ渊と
に押よせより小田方の番船ともうち謀計にかかりしと
ハ夢にもしらず今宵こそ室や兵庫乃桂若を宴にめし
よせけんぞの夢をむすびんとて酒に酒洞し肴を求めて日の
暮るをまちしも今やおそしと待てる小晴夜なれバ物のかいろ
ハ別ねども多くの船ども燈火のかげもなく人ハ此所へ押来
るハ必ど桂安の船ならんと皆船にて立出て宴へへ
招きなる百余艘の兵船ちかづくとぞ漕寄一言の論にも
及ばず鉄炮の筒先をそろへ放ちかくとおちくもはなち
かけたる番船どもも矢庭に倒れ死する者二百余人毛利



川分口
合戦

勢数多の松明一時に とり立て周を懸けてのけ せく
番船に乗り合せ切立てば 花女と祭うる
船ありとのこゝろひ更に戦ふべき心なき小田方の軍兵行
の要より出るべき七郎八戴に斬碎き迯るを左なく
退くに途を失ひ切殺さるゝ者麻を乱せるごとし 方に
摘へうる小田乃城こゝより出るふ山街を見くをいや川分
口木津雑賀乃 砦に後軍でを始つゝ軍兵を出く
駆えよと伝吉の涙をうり同猶七又三玄湯沼伊内二
百余人又十余艘の船に乗り一文字に漕来るが
瓦ケ崎より荒木ゲ多勢を余人なり渡を切て押来る
を神に ひらし元利の兵船左右に別れ弓鉄炮をあら

霰と打出し 兵粮を積し大船には鉄炮火薬を押るべ
故よりて 番船の中へどう〳〵と打込ゆゑふ讓り先
に歌とべき又神と碎き又天を換じうぶめきうるしむ
其中へ船軍に調練せ 廣鳴勢平地と馬にて駆るゞ
ごとく車に乗り西に向ひ歌船に花祭りていひ切斬
殺し 縦横にのけるやはし八隅に切るびけるとだうう
責らせるる林に宿るる震多と討に矣うしに冷うる
戦ひなり

丹羽桃溪畫

繪本拾遺信長記後篇

全部十二冊

近刻

信長記　全部八冊　小瀬甫菴著

織田信長ニ一世ノ勲功爭戰ノ勝敗ヲ論シ記ヲ

拾遺信長記　全部十冊　離嶋秋里著

織田信長ニ石山本願寺ト年揖ノ怒ヨリ起後十餘年ノ戈戰ヲ記ヲ

織田軍記　全部二十三冊　石川遠山著

信長記ト場補シ二代ノ奇謀妙算屈州ヲ專ハ天下ヲ傾ケ去ル始末ヲ記ヲ

彫刀氏姓名

京都　乎上治兵衛
〃　樋口源兵衛
大坂　市田次郎兵衛
〃　池田長右衛門

享和三年癸亥四月

東都書肆　西村宗七

譽田屋伊右衛門

攝都書肆　和泉屋源七

播磨屋五兵衛